

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	古典語の動詞の活用
Author(s)	カタリナ パナイト,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 19期 : 62 - 75
Issue Date	2005-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038847">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038847</a>
Right	
Relation	



## 古典語の動詞の活用

カタリナ・パナイト

### はじめに

古典語というのは不変の統一体ではなく、古典の文法、語彙、文の構造はずっと変わってきたものである。理論上、平安時代から発達してきた日本語というものを歴史的に理解するべきであるが、地方と時代における相違点は種々であるので、日本語の発達段階を別個に理解することは実質不可能なことである。

日本語では現代の口語に対して特に平安時代を基礎として発達固定した言語の体系、または、それに基づく文体のことを文語という。平安時代の日本語は『源氏物語』と『枕草子』という文芸の名作の言語であり、その構成を理解するようになれば、現代語までの日本語の発達は分かりやすいと思う。それに従って、10世紀—11世紀の平安時代の日本語における文法的な研究をしたいと思う。

しかし、その時代の文の構造は緩和されるため、頻繁に多様性が生じる。更に古典語の語彙は現代日本語の語彙とは異なっている。使われていなくなった言葉、音素論的に変化してきた言葉、意味が変化してきた言葉もある。又、現代日本語と古典語の音素の形は同様であるが、意味が変化してきた言葉もある。

例：

古典語	古典語の意味	現代語	現代語の意味
うつくし	かわいい	うつくしい	きれい
いもうと	恋人	いもうと	同じ親から生まれた年下女子
花	主に、桜の花	花	一般の野生植物

### 活用のある品詞：

古典語でも、現代語でも、十種類の品詞、活用のある品詞と活用のない品詞に分類

されている。活用のある品詞が四つあり、それらは動詞、形容詞、形容動詞、助動詞である。

### 動詞の特徴

平安時代の古典語でも現代語でも動詞の機能は同様であるが、活用が異なる。現代語の動詞の活用形は未然形、連用形、終止形、連体形、仮定形、命令形であり、古典語の動詞の活用形：未然形、連用形、終止形、連体形、已然形、命令形である。

未然形は未然の意味があり、動詞の動作がまだ完了していないという意味も示しているが、この未然の意味は「ない」という助動詞の場合には明らかなのに、受け身を指示する「れる」・「る・らる」という助動詞の場合に未然の意味ははっきり見えない。

現代語：「キッチン」という本が吉本ばななによって**書**かれた。

この文では、「書か〜」という形は「書く」という動詞の未然形であり、この形に受け身を示す「れる」という助動詞が付いた。この助動詞にも「た」という完了の助動詞が付いたが、未然形に直接に受け身の助動詞が付く場合、未然の意味ははっきり見えないと思う。

### 現代語と古典語の未然形に付く助動詞の例

現代語の未然形に「ない」という助動詞が付く。古典語の未然形は同じ意味があるが、この形に付く助動詞の数がずっと多い。未然形に付く助動詞は「ずー打消の意味」・「じー打消の推量の意味」・「む（ん）ー推定の意味」・「る・らるー受け身」・「すー尊敬の意味」・「さすー尊敬の意味」・「しむー使役の意味」・「ましー推量の意味」・「まほしー希望の意味」・「むずー推定の意味」である。更に、古典語の未然形に仮定を表す「ば」という助詞も付く。

古典語：皆人見知らず。(伊勢物語)

「知ら〜」という形は、「知る」という四段の動詞の未然形であり、その形に「ず」という打消の助動詞が付く。

現代語：誰も見たことがなくて、(名前も)知らない。

古典語：言はまほしからむこと。(源氏物語)

「言は～」という形は「言う」という四段の動詞の未然形であり、そのかたちに「まほし」という希望の意味を表す助動詞が付く。「まほしから」という形は「まほし」の未然形である。

現代語：言いたいと思っていること。

連用形は接続の形であり、現代語の連用形に「ます」という助動詞・「て」という助動詞が付く。古典語の連用形に「き一過去の意味」・「けり一過去の意味」・「つ一完了の意味」・「ぬ一完了の意味」・「たり一完了の意味」・「たし一希望の意味」・「けむ一推量の意味」が付く。それに、「て」という助詞も付く。

古典語：その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。(伊勢物語)

「咲き～」という形は、「咲く」という四段の動詞の連用形であり、その形に「たり」という完了の助動詞が付いたが、この場合に「たり」の意味は、前に動詞の動作が完了されたのに、その動作の結果が現在でも見えるということである。

現代語：その沢にかきつばが大変きれいに咲いていた。

古典語：舟こぞりて泣きにけり。(伊勢物語)

この文では、「泣き」という形は四段の動詞の連用形であり、その形に「ぬ」という助動詞が付いたが、「たり」という過去の助動詞が連続しているから、「ぬ」という助動詞の形が連用形になる。

現代語：舟の人達がみんな泣いてしまった。

終止形は文末の形である。古典語の終止形に「まじ一打消の推量の意味」・「べし一推量の意味」・「らむ一推量」・「めり一推量の意味」・「らし一推量の意味」・「なり一推量の意味」という助動詞が付く。又、ラ変・カ変・サ変の場合に、古典語と現代語の形が異なっている。

古典語：人の歌の返し、とくすべきを... (枕草子)

「す」という形はサ変の動詞の終止形であり、「べき」という形は推量を表す「べし」という助動詞の連体形である。

現代語：(他の人から) もらった和歌の返事をすぐしなければならない...

古典語：ただ今は納言になむはべるめれ。(宇津保物語)

「はべる」はラ変の動詞の終止形であり、この文には「なむ」という係助詞なので、文末の「めり」の形が連体形になる。

現代語：今納言でございます。

連体形は、現代語でも古典語でも、名詞を修飾する形である。古典語と現代語の形はだいたい同じであるが、上二段・下二段・ナ変の動詞の場合に形が異なっている。

古典語では、「なりー断定の意味」・「ごとしー比況の意味」という助動詞が付く。

### 已然形 (現代語の仮定形)

現代語の仮定形と古典語の已然形は同様であり、上二段・下二段・ナ変の已然形は現代語の仮定形と相違点があり、又、現代語と古典語の意味も異にする。

古典語の已然形に「り」という完了の意味を表す助動詞が付く。(サ変の動詞の除外；この動詞の場合に、「り」という助動詞が未然形に付く)。

古典語：道知れる人もなくて... (伊勢物語)

「知れ〜」という形は四段の動詞の已然形であり、「り」の形は、「人」という名詞が修飾しているから、「る」という連体形の形になる。

現代語：道を知っている人もいない...

命令形は現代語でも古典語でも同じ意味がある。

古典語：「旅の心をよめ」といひければ... (伊勢物語)

「よめ～」という形は「よむ」という四段の動詞の命令形である。

現代語：「旅について (和歌に) よみなさい」と言ったので...

現代語の仮定形と古典語の已然形の相違点：

現代語では、仮定形が条件・仮定を表すために使われている。仮定の意味を指示する「ば」という助詞が続くと、意味が仮定・条件になる。

現代語：食事を減らせば誰でもやせる。

「減らせ～」という形は「減らす」という現代語の五段の動詞の仮定形であり、この形に条件の意味を表す「ば」という助詞が付き、文の意味が一般条件になる。とはいえ、古典語では「ば」という助詞に二つの意味があり、已然形に付く場合に、意味が完成・完了になる。これは最も注目すべき相違点である。相似の形であるが、意味が異なっている。

古典語：富士山を見れば... (伊勢物語)

「見れ～」は「見る」という上一段の動詞の已然形である。

現代語：富士山を見ると...

現代語の訳に見える通りに、「ば」という助詞が已然形に付くと、「何々すると～」の意味になる。

未然形に「ば」が付く場合に、意味が仮定になる。

古典語：その山は、こゝにたとへば... (伊勢物語)

「たとへ」という形は「たとふ」という下二段の動詞の未然形である。その形に「ば」という仮定・条件を表す助詞が付く。

現代語：その山は、ここで例をあげたら...（ここの山の例）

### 係り結びの法則

係り結びということは普通文末が終止形であるが、文中に係助詞があると文末の形が連体形か已然形になるということである。「ぞ・強意の意味」・「なむ・強意の意味」・「か・疑問／反語の意味」・「や・疑問／反語の意味」が文中にあると、文末の動詞の形は連体形になる。

古典語：その人、かたちよりは心なむまさりたりける。（伊勢物語）

「ける」という形は完了の意味を表す「けり」という助動詞の連体形である。

現代語：その人は顔より心のほうが優れていた。

「こそ・強意の意味」が文中にあると、文末の形は已然形になる。

古典語：もののははれは秋こそまされ。（徒然草）

「まされ〜」という形は、「まさる」という四段の動詞の已然形であり、「こそ」という係助詞が文中にあるから、文末の形は已然形になる。

現代語：ものの情越は秋が一番だ。

古典語：和歌こそなほをかしきものなれ。（徒然草）

「なり」という助動詞の文末の形は已然形になる。

現代語：和歌はやはり趣のあるものだ。

### 動詞の活用のグループ

古典語の動詞のグループは九つある。現代語と比べてその数がずっと多いことは明らかである。現代語には五つしかないからである。古典語の動詞のグループは上一段、上二段、下二段、下一段、四段、ナ変、ラ変、カ変、サ変である。現代語の動詞のグ

ルプは上一段、下一段、五段、カ変、サ変である。

現代語において、古典語の上一段・上二段のグループは下一段になり、下二段のグループは下二段になり、下一段・四段・ナ変・ラ変のグループは五段になり、カ変とサ変のグループは現代語で同じ活用のグループである。次の表に、古典語の動詞のグループは現代語ではどういうふうに変わってきたかということが見える。

<u>古典語</u>	上一段 上二段	下二段	下一段 四段 ナ変 ラ変	カ変	サ変
<u>現代語</u>	上一段	下一段	五段	カ変	サ変

### (1) 古典語の四段の動詞

このグループは現代語では五段になったのである。

四段の動詞の例：書く・申す・宣ふ・給ふ・読む・詠む・知る・待つ・落とす・参る・言ふ。

動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
書く	かか～	かき～	かく	かく～	かけ～	かけ～
知る	しら～	しり～	しる	しる～	しれ～	しれ～
給ふ	たまは～	たまひ～	たまふ	たまふ～	たまへ～	たまへ～

例文を利用して例示された四段の動詞：

古典語：火などいそぎ おこして... (枕草子)

「いそぎ～」は「いそぐ」という四段の動詞の連用形である。「おこし～て」は「おこす」という四段の動詞の連用形である。「て」という接続の助詞が付くから、動詞の形が連用形になる。

現代語：火のようなものをいそいで起こして...

古典語:それをすみだ川といふ。(伊勢物語)

「いふ」という動詞は文末にあるから形が終止形になる。

現代語:それをすみだ川とよんでいる。

古典語:苦しきことのみまされば... (源氏物語)

まされ・ばー已然形

現代語:苦しいことばかりが多いので...

## (2) 古典語の上一段の動詞

このグループは現代語で同じ活用のグループである。

上一段の動詞の例:見る・試みる・似る・顧みる・射る・居る・下りゐる

動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
見る	み〜	み〜	みる	みる〜	みれ〜	みよ〜
射る	い〜	い〜	いる	いる〜	いれ〜	いよ〜

上に例挙した上一段の動詞以外はほとんどない。この動詞のグループの活用は現代語の活用と大体同様である。

例文を利用して例示された上一段の動詞:

古典語:富士の山を見れば...

「みれ〜」と言う形は、「見る」の已然形である。

現代語:富士山をみると...

古典語:すずるなるめを見ることと思ふに... (伊勢物語)

「見る」は、「こと」という名詞を修飾するから、動詞の形が連体形になる。

現代語：理由がなくても、ひどい目にあうことと思っていると...

古典語：その沢のほとりの木の陰に下りゐて... (伊勢物語)

「下りゐ～」は「下りゐる」の連用形である。「て」という連続の動詞が続いているから、動詞の形は連用形になる。

現代語：その沢のそばの木の陰に、(馬から)下りて...

### 古典語の上二段の動詞

このグループは古典語では上二段であったが、現代語で上一段になった。

上二段の動詞の例：落つ・恥づ・恋ふ・尽く・忍ぶ・老ゆ・過ぐ

動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
落つ	おち～	おち～	おつ	おつる～	おつれ～	おちよ～
過ぐ	すぎ～	すぎ～	すぐ	すぐる～	すぐれ～	すぎよ～
恋ふ	こひ～	こひ～	こふ	こふる～	こふれ～	こひよ～

例文を利用して例示された上二段の動詞：

古典語：暁にはとく下りなん... (枕草子)

「下り～」は「下りる」の連用形であり、「な」は完了の意味を表す「ぬ」という助動詞の未然形である。

現代語：夜明けに早く退出しよう...

古典語：落つる紅葉...

「落つる」は「落つ」という下二段の動詞の連体形である。「紅葉」という名詞の前にあるから動詞の形は連体形になる。

現代語：散って落ちている紅葉...

古典語：涙も落ちぬべければ... (枕草子)

「落ち～」は「落つ」という下二段の動詞の連用形であり、「ぬ」は完了を表す助動詞である。

現代語：涙さえこぼれてしまうほどなので...

### (3) 古典語の下一段の動詞

このグループには動詞が一つしかない。「蹴る」という動詞は現代語では五段の動詞に変わってきた。

動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
蹴る	け～	け～	ける	ける～	けれ～	けよ～

例文を利用して例示された下一段の動詞：

古典語：さと寄りて一足づゝ蹴る。(落窪物語)

「蹴る」は終止の形である。

現代語：早く近づいて一人ずつ蹴る。

### (4) 古典語の下二段の動詞

下二段の動詞は現代語で下一段になった。

下二段の動詞の例：聞こゆ・出づ・冷ゆ・尋ぬ・眺む・答ふ・比ぶ・助く・越ゆ・忘る

動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
出づ	いで～	いで～	いづ	いづる～	いづれ～	いでよ～
尋ぬ	たづね～	たづね～	たづぬ	たづぬる	たづぬれ	たづねよ
答ふ	こたへ～	こたへ～	こたふ	こたふる	こたふれ	こたへよ

例文を利用して例示された下二段の動詞：

古典語：いとちはひさくみゆるはいとをかし。(枕草子)

名詞が省略されたので、「みゆ」の形が連体形になる。

現代語：(雁) たいそう小さく見えるのは、とても趣があつていい。

古典語：日入りはてて... (枕草子)

「て」という連続の助詞が「はつ」という動詞の連用形に付く。

現代語：日がすっかり沈んで...

### (5) カ変の動詞

このグループには「く」という動詞が一つしかない。現代語において同じ活用のグループになり、次の表に見えるとおり、古典語と現代語の活用形がよく似ているが古典語と現代語の終止形と命令形が異なっている。

動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
来	こ～	き～	く	くる～	くれ～	こよ～

平安時代では「こよ」という連体形から「よ」を除外され、動詞の連体形は「こ」になる場合が多い。

例文を利用して例示された下二段の動詞：

古典語：秋来ぬと目にはさやかに見えぬども...

「ぬ」は完了の意味を表す助動詞の終止形である。だから、動詞の形が連用形になる。

現代語：秋が来たと目にはっきり見えないけれども...

### (6) サ変の動詞

このグループは、現代語において同じ活用になったが、現代語のサ変の動詞がひとつしかない。その動詞は「する」という動詞である。他の動詞は使われなくなったか、下一段の活用になった。(古典語の「感ず」という動詞は現代語では「感じる」という下一段の動詞になった)。

サ変の動詞の例：す・念ず・感ず・御覽ず

動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
す	せ～	し～	す	する～	すれ～	せよ～
感ず	かんぜ～	かんじ～	かんず	かんずる	かんずれ	かんぜよ
念ず	ねんぜ～	ねんじ～	ねんず	ねんずる	ねんずれ	ねんぜよ

現代語の「する」という動詞に関して、この動詞が古典語に比べると未然の形の数がもっと多いことが明らかである。現代語の「する」という動詞は未然形の形が三つあるからである。その形は「せ」・「し」・「さ」である。「せ」という未然形は「ず」という未然の助動詞が付く場合に使われている。「し」という未然形は「ない」という打消の意味を表す助動詞が付く場合に使われている。「さ」という未然形は「れる」という受け身の助動詞場が付く場合に使われている。

例文を利用して例示された下二段の動詞：

古典語：念じて見などす。 (枕草子)

「念じ」は「念じる」というサ変の動詞であり、「て」という接続の助詞が付いているから、動詞の形が連用形になる。「す」というサ変の動詞は、文末にあるからその動詞の形は終止形になる。

現代語：祈って拝見しています。

### (7) ナ変の動詞

このグループには二つの動詞があり、その動詞は「死ぬ」・「往ぬ」である。「往ぬ」という動詞は使われなくなったが、「死ぬ」という動詞は現在五段活用形にあり、現代語では終止形が「ぬ」で終わる動詞は「死ぬ」しかない。

動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
死ぬ	しな～	しに～	しぬ	しぬる～	しぬれ～	しね～
往ぬ	いな～	いに～	いぬ	いぬる	いぬれ	いぬ

例文を利用して例示された下二段の動詞：

古典語：これをやれとて**往ぬ**。(伊勢物語)

「往ぬ」というナ変の動詞の形は文末にあるから、終止形になる。

現代語：これをあげなさいと言って立ち去る。

### (8) ラ変の動詞

この活用形の動詞は現代語において全部五段活用になった。

ラ変の動詞の例：有り・在り・居り・侍り

動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
有り	あら～	あり～	あり	ある～	あれ～	あれ～
居り	をら～	をり～	をり	をる	をれ	をれ

例文を利用して例示されたラ変の動詞：

古典語：都にはあらじ。(伊勢物語)

打消の推量を表す「じ」と言う助動詞が「あり」というラ変の動詞の連用形に付く。

現代語：都にいるまい。

## おわりに

このレポートは主に古典語の動詞の活用についてである。動詞に関する言うべきものがまだ多いと思うが、このレポートは動詞の活用に中心するつもりだった。動詞の活用は複雑なものであり、このレポートでは、活用形と動詞のグループについて述べたが、その活用形に付く助動詞と助詞についてははっきり述べなかつたと思う。が、その助動詞と助詞の数は多いから、その問題は別個に注目すべきだと思う。

このレポートの項目が古典語の例文を利用して例示された。その例文は「源氏物語」・「枕草子」「伊勢物語」等から引き出された。

## 参考文献

山内洋一郎 2003 「活用と活用形の通時的的研究」 清文堂出版

仲光雄 2000 「仲先生の古文文法の基礎と実践」 文英堂

鈴木一彦、林巨樹 1984 「用言編（一）動詞」 明治書院

吉川武時 1989 「日本語文法入門」 アルク

Ikeda Tadashi, 1975 [Classical Japanese Grammar], The Toho Gakkai (The Institute of Eastern Culture)